第９分科会　里山と政策

テーマ「子どもと里山」

プログラム

10:00〜10:05　あいさつ、趣旨説明
10:05〜10:25　事例紹介①里山保育園（社会福祉法人わこう村　和光保育園園長兼大工　鈴木まひろ）
10:25〜10:50　事例紹介②子どもたちの森（千葉市役所公園緑地部　鈴木康博）
10:50〜11:15　事例紹介③四街道ﾌﾟﾚｰﾊﾟｰｸどんぐりの森（四街道ﾌﾟﾚｰﾊﾟｰｸどんぐりの森代表古川美之）
11:15〜12:10　質疑応答
12:10〜12:15　まとめ

参加者　　１８名

基調講演等の内容

●里山保育園・・・発表者鈴木眞廣さん（富津市和光保育園園長）

鈴木さんの美しい歌声「だってここは、雨もり保育園」で始まり、保育園での子どもたちの生活の様子が映像で紹介された。

来年で 50 周年になるが、最近まで雨もりを楽しむ保育園だった。園の周りには里山が広がっている。里山はあってあたりまえの対象だった。命は自然とともに進化･多様化してきた。都市化されればされるほど、子どもたちには社会の仕組みが見えにくくなっていく。自然とのかかわりが大切になってくる。原因と結果を子どもたちの生活経験の中に入れることが大切。子どもたちの周りに、里山の恵みを受けながら暮らす大人がいてくれる経験を現風景にして、子どもたちがその中で遊び、大人を手伝い、達成感を味わえたり、そんな関係を保育園の周りの大人たちとのたくさんの出会いを通して作っていきたい。

●子どもたちの森・・・鈴木康博さん（千葉市役所緑政課）

身近な自然環境の減少に伴い、子どもたちの遊び場は公園が中心となったが、公園は安全性に配慮して「やってはいけないこと」を設定したため、子どもたちの自主的な発想による遊びが少なくなっている。千葉市では、子どもたちが自分の責任で自由に遊ぶ空間づくりをめざし、「子どもたちの森」の整備を進めている。「子どもたちの森をつくる会」をつくり、また、「子どもたち森だより」を発行している。段階的森づくりとして、４つの「づくり」。①ものづくり（行政がつくるものではなく、みんなでつくるもの）、②企画づくり（行政企画ではなく、市民企画）、③仲間づくり（地権者、近隣住民、学校、市民団体などの地域資源と連携･協力）、④ルールづくり（みんなが合意）。キーワードは、人のつながり・地域の人材の活用・行政も現場に入り込むこと。課題は、行政内の役割分担。

●プレーパーク「どんぐりの森」・・・古川美之さん（四街道プレーパークどんぐりの森）

現在の生活の中には自然が少なく、いわゆる作られた公園が多い。自然豊かな中で暮らしたいと思っていたところ、ちば環境情報センターという市民団体と関わるようになって、市民でもできることがあると知った。平成 13 年から身近なところで仲間集めを始め、14 年には地元の公園を借りて、プレーパーク(冒険遊び場)を開設した。県のモデル事業「県･市町村･ＮＰＯがともに築く地域社会事業」がきっかけで 16 年 9 月には里山を借りて、四街道プレーパーク「どんぐりの森」をオープンした。自然の中ではいろいろな発見があり、子どもたちはそこにあるものを利用して遊びができるようになった。手入れをしすぎてはいけない。

「場」ができると、人が集まってきて、いろいろな人たちと関われる。行政だけでは進まないときには、自ら行動を起こし、多くの人に知ってもらい、地域の人を巻き込むことが大切。

討論会等の内容

(問い)自然と触れ合う機会のない子、関心のない子、親が関心のない子が体験するようになるにはどうしたらいいのか。

(回答)やってみないとわからないので、時間をかけて、都合のよいときに、気の長い付き合いが必要。楽しく、無理せず、頑張らないこと。いろいろな参加の仕方があるということを伝える。遊べない子には、生き生きと遊んでいる子の姿を見せたり、スタッフがサポートする。子どもの生活圏に、身近に「遊び場」があることが必要。

(問い)身近にプレーパークになりそうな場がないとき、都市公園を生かすにはどうしたらいいか。

(回答)その「場」での遊びを工夫することが大切。プレーリーダーを養成し、派遣してはどうか。

●参加者から

テレビゲームの遊びが定着してしまい、なかなか外に出ようとしない子が多い。ふるさとのない子どもが増えている。

里山は総合学習の場である。里山はストレスを癒してくれる。子どもの存在そのものが里山。

分科会の結論

都市化で身近な自然・里山が失われて、子どもたちが自然に触れ合う機会が減ってしまった。社会とかかわらない、実体験の乏しい現代の子どもたち。自然に関わることで多くのことを発見し、実感する。思いを実現していくためには、自らが声を出し、場をつくり、人を巻き込み、つながっていくことが重要で、政策とは私たち自らがつくっていくものである。

分科会の課題

自ら積極的に社会の仕組みに関わっていくことが少なくなっている現在、自分には関係ないと思っている人たちをどう巻き込んでいくかが課題である。

分科会の提言

木の枝で隠れ家をつくったり、落ち葉を集めて積み上げたり、つるにぶら下がったり・・・。いったん森の中に入りさえすれば、子どもたちはそれは生き生きと自由に遊びを編み出す。里山は想像力をふくらませる「場」。

里山に子どもたちの声が響く保育園、子どもたちを自然の中で育てたいとの思いからプレーパークを実現したおかあさん、都市部でも豊かな自然の遊びを提供する自治体など様々な取り組みが行われている。

豊かな自然の中で子どもたちを育てたい、それは誰もが望むこと。行政任せにせず、自らが声を出し、動き出す勇気が必要。同じ思いを持った様々な人々がつながり、行政とも連携して、思いが形になったとき、大きな喜びや達成感が生まれる。

政策とは自らつくっていくものである。

反省等

「政策」という名称が硬く、取っ付き難かったのだろうか、参加者が少なかった。

スタッフ

代表：小西　由希子　副代表・記録：内山　真義

委員：伊原　加奈子、金親　博榮、瓜生　達哉、長　正子、小西　朝希子、田中　正彦